

問 10 (東京都 2020)

現代文

内容合致

次の文章で述べられていることとして、最も妥当なのはどれか。

ある特権的瞬間に過去の経験が再構造化されるということは、それほど珍しいことではない。動物にさえも、こうしたことは認められる。以下の話は、動物は現在だけを生きていると言った先ほどの話と齟齬^{そご}するように聞こえるであろうが、動物にとっても現在は瞬間的なものではなくある厚み、ある幅もっている。神経系の分化が進めば、その幅も増してくるであろうが、以下の話は現在のその幅のなかでのことと思っただきたい。

心理学の中心テーマの一つに、動物がいかにして新しい行動様式を学習するかを実験的に解明しようとする<学習理論>がある。アメリカ心理学の先駆者の一人ソーンダイクの提唱した有名なくトライアル・アンド・エラー試行錯誤説は、たとえばカンヌキをかけられた檻のなかにネコを入れ、そのネコがカンヌキをはずしてエサをとるという新しい行動様式をどのように学習するかを観察し、次のような結論に達した。つまり、ネコがランダムに反応を繰り返しているうちに、解決にいたる反応では報酬(エサ)が与えられ、解決にいたらない反応では報酬が与えられないので、しだいに報酬の与えられる反応だけが高い頻度で繰り返されるようになり、それが定着するというのである。

だが、この考え方には欠陥がある。というのも、この実験はネコが正しい解決にいたれば終結するのが普通である。頻度から言えば、失敗の方がはるかに多く、正しい解決にいたる反応は、ばあいによれば一度だけでも定着するのである。

そこで、ゲシュタルト心理学の創唱者の一人であるヴォルフガング・ケーラーは、チンパンジーを使って同じような実験をおこない、こうした課題解決行動の学習は、けっして反応の頻度によってではなく、状況へのある種の<洞察インジグト>によっておこなわれるものであることを明らかにした。

このばあい、成功した反応が学習され、定着するというのは、その反応がおこなわれたとき、つまりある志向が充たされた特権の瞬間に、数々の失敗をふくむこれまでの経験が再構造化され、それらがこの成功にいたるための試行にすぎなかったという意味を与えられたということであろう。そのとき、いわゆる「ああ、そうか」という体験アッハ・エアレブニス (Aha-Erlebnis—ドイツの心理学者カール・ビューラーの用語)がおこなわれるのである。

- 1 動物にとって、現在は瞬間的なものではなくある厚み、ある幅をもっているものなので、過去の経験が再構造化することはない。
- 2 心理学の中心テーマの一つである学習理論とは、動物がいかにして新しい行動様式を学習するかを実験的に解明しようとするものである。
- 3 ソーンダイクの提唱した試行錯誤説では、ネコが新しい行動様式をどのように学習するかを観察し、ある反応が高い頻度で繰り返されるとともに、それが定着することはないとしている。
- 4 ヴォルフガング・ケーラーは、チンパンジーを使った実験をおこない、課題解決行動の学習は、反応の頻度を問わず、偶然によるものであることを明らかにした。
- 5 成功した反応が学習され、定着するというのは、これまでの経験が再構造化されることなく、成功にいたるという意味である。

■■〔正解〕2■■

出典 『偶然性と運命』木田元

□□ 1 ×

本肢「過去の経験が再構造化」に着目する。1段落目には、「過去の経験が再構造化されるということは、それほど珍しいことではない。動物にさえも、こうしたことは認められる」とある。

□□ 2 ○

本肢「学習理論」に着目する。2段落目に、学習理論は、心理学の中心のテーマの一つであり、動物がいかにして新しい行動様式を学習するかを実験的に解明しようとするものである、と述べられている。

□□ 3 ×

本肢「試行錯誤説」に着目する。2段落目によると、ネコが新しい行動様式をどのように学習するかを観察し、報酬の与えられる反応だけが高い頻度で繰り返されるようになり、それが定着する、と述べられている。

□□ 4 ×

本肢「ヴォルフガング・ケーラー」に着目する。4段落目に、彼のチンパンジーを使った実験により、課題解決行動学習は、反応の頻度によるものでないと述べられている。しかし、それが偶然によるものであることを明らかにしたとは述べられていない。

□□ 5 ×

本肢「成功した反応が学習」に着目する。5段落目に、成功した反応が学習され、定着するというのは、その反応が行なわれたとき、これまでの経験が再構造化される、と述べられている。